

## 両足院（建仁寺派）の收藏資料について

五十嵐金三郎

### 目次

はじめに

両足院と林家

收藏資料（「抄物」を中心に）

現状と利用

むすび

### はじめに

去年の秋、京都建仁寺派両足院を訪問する機会を得て、主として、コレクションの形成、旧蔵者、資料内容、数量、保存状態、目録、利用等にわたって見聞することができた。

以下は、その概略の報告である。

### 両足院と林家

両足院は、建仁寺派の一塔頭として、同寺第三十五代の僧、竜山徳見（一一二一—一一三三）の開基になる禅宗（臨濟）の名刹

である。

徳見は、嘉元三年（一一五三）二二才で入元し、求法生活四五年を経験して、貞和五年（一一三三）六六才の時に帰朝した名僧で、帰朝に際して、禅僧十七名、船主以下中国人十一名を随侍した（圓太僧観応元年四）。その中に饅頭屋林家（のち塩瀬）の先祖である林浄因も加わっている。

浄因は帰化し、子孫は奈良と京都に住して饅頭屋を業としたが、かつて饅頭を宮中に献じてより思召しも厚く、又当時第一級の文化人との交渉も広く行なわれた関係上、その方の影響も大きく自ずと有為の人材が育っていった。もとより林家は、代々仏に帰依する心が厚く、五山の諸

利に出家する者が多く、仮に出家しないまでも、此等一門の先徳に参じて禪を修学する徒が多かった。従つて、篤学の士も多く輩出し、就中淨因より三代を経た林宗二（九八一—一五）の出現によつて、学界に寄与すること著しいものがあった。

宗二は室町末期から桃山時代にかけて活躍した学者で、いわゆる「抄物」の筆録者としてのみならず、自らも講じ、又饅頭屋本節用集の編録者として、更には源氏物語の注釈書である「林逸抄 五十四卷」の著者として著名である。和歌を三条西実隆や牡丹花肖柏から、そして、儒学を当代の名儒清原宣賢（七五—一五）からそれぞれ学んだことはよく知られており、のちに彼の門に修学する者も多く現われた。

一方、両足院と林家との関係は、単に師檀の間柄のみならず、初期の歴代住持は、多くは竜山徳見の法を継ぐ林家出身の僧によつて占められている。即ち、無等以倫、文林寿郁、悦巖東念、和仲東靖、梅仙東通、利峯東鋭等で、江戸初期まで林家の色彩が濃厚で、さながら当院と林家とは一家の如き関係であつた。

こうした関係で当院には、この林宗二の筆録本及び父の学問を継承し、両足院の住持となつた息男の梅仙東通の筆写本がまゝとまつて収蔵され、その後も林氏門下の当院の住職の手によつて保存され、今日まで残されている。

#### 収蔵資料（「抄物」を中心に）

今日当院に収蔵されている資料は、右に記した経緯から推測しても、奈良、平安といった古代に遡れる程の古典籍はなく、中世から近世にかけての和装の典籍が主である。

当院備付の目録（後説）によると、蔵書数は、タイトル数にして約二、五〇〇内外、その中抄物は約四〇タイトル、五山版約九〇タイトル、漢籍約八〇タイトル、それに朝鮮本、国書それぞれ若干ずつ含まれている。これらの他は仏書が相当数を占め、ほとんどが江戸期の刊写本類と推測される。

いづれにしても、林宗二、梅仙父子の筆録手写にかかる抄物と、五山版および漢籍が庫中の白眉といえる。とはいえ、江戸時代の刊写本といえども、当院歴代の学僧の手写手沢になる典籍が多く含まれ、当院の学問に対する真摯な姿を彷彿させている。

今回わずかに抄物を中心に披見することが許されたが、林宗二自筆の書写奥書の中に、擾乱にあげられた戦国時代の世情の一端を書き留めた識語などもあり、乱世に生きる姿をかい間見た思いで、一そう興味深いものがある。以下それらの資料の一部を列挙して、参考に供したい。

抄物(箱番号順)

一五一番

蒙求抄 存卷上ノ上下、中ノ下 三冊 片仮名交じり仮名

抄 ソ式体 茶表紙原裝

識語

上卷末(一五三四)

天文三年甲三月八日作之此年閏正月アリ

安盛三十七才

(一五四八)

同年号十七年三月写之 定生廿六才

蒙求抄 存卷上ノ上中下、中ノ下 四冊 片仮名交じり仮

名抄 ソ式体 茶表紙原裝 筆跡後掲「周易抄」に酷

似、宗二筆か 前掲書を含め「共七冊」と表紙に記

す

東坡抄 二五卷 三十冊 宗二筆 片仮名交じり仮名抄

ソ式体 茶表紙原裝

識語

卷二末(一五四一)

于時天文十年辛孟陬初二日於法隆學問寺瓦坊南台窓下

終功了 破関子

(四十九) 三才

卷三末(一五四〇)

天文九年四月廿五日

卷四末

天文十年丑八月廿八日

卷五末 天文十年辛五月廿三日於瘧疾之中終功了 破関子

卷六末(一五五二)(卷六異筆)

天文廿年辛亥二月廿三日初更一点書之林氏三関二百

卷八末 天文十年辛十一月朔半夜於南都抄之了 宗二

卷九末(一五四二)

天文十一年壬寅四月十三日抄之了

卷十末 天文十年辛丑十一月十一日終功了

卷十一末 天文十一年寅三月廿二日於法隆寺書之去十七日

(卷九) 木沢左京亮主□

卷十二首 天文十一年三月廿二日始之

同末 天文十一年閏三月晦日

卷十三末 天文十一年四月二日 破関 四十四才

卷十四末

以繞翠秘抄梅庵天下白蘭庵默雲二老ノ書寫參併之抄者也

天文十一年六月晦日於法隆教寺瓦坊南亭書之 破関子

四十四才

卷十五末(一五五五)

天文乙暮春尽廿八資先達之諸抄纂□三関齋宗和

五十七才

(一五七四)  
天正二年<sup>甲戌</sup>暮春十五日早天写之訖 方生齋宗二

七十七才

卷十六末  
天文十一年<sup>壬寅</sup>七月二日 宗二 四十五才

卷十七末(一五四三)

天文十二年<sup>癸卯</sup>三月十九日酉尅了終日大雨於南都花林院

卿抄之了 宗二

卷十九末

〔宗カ〕  
和奥書云

(一五五五)  
天文廿四乙卯林鐘初三昕晚鐘終之

卷二十首  
六月四日始之 同末  
天文廿四年孟秋單五

卷二十一首  
弘治三〇春廿三

同末 (一五五七)  
本云 弘治第三臘十四及暁天書之 三関齋

(一五七三)  
天正元年臘十五及夜半写之 宗二

卷二十四末(一五六五)

永祿第八<sup>丑</sup>年季春後六日三条烏丸不林庵而記之坡集一  
部大略抄之訖 宗二 六十七才

卷二十五末(一五六三)  
永祿第六癸亥三月十八日 宗二 六十五才抄之

一五二番

四河入海 五十冊 梅仙筆カ 片仮名交じり仮名抄

尚書抄 十三卷序一卷 十三冊 片仮名交じり仮名抄 ナ  
リ式体 茶表紙原裝 筆跡宗二筆に酷似するも、ま  
異筆を交じえる

史紬列伝 八冊 宗二筆 漢文注 茶表紙原裝

識語

第一冊末(一五一七)

永正十四年仲秋廿日写之并校一部点了 臘日求白紙可

清書之 都督 判

(一五七四)

天正貳年霜月廿五日三条西殿御本申出令書写了 月舟

和尚御抄也 宗二(花押)

第四冊末(一五一四)

永正十一 十二写了

第七冊末(一五一五)

永正十二年十月廿九日了

第八冊末 (三条西実隆)  
永正十二年仲冬廿日跪承聽雪之尊命聊記幻雲之秘伝者

也 大□都叔 判

一五四番

百納襖 二三冊 宗二筆 片仮名交じり仮名抄 ソ・ナリ

式混体 栗皮色表紙原裝 (第一冊のみ披見)

古文尚書 十三卷 六冊 梅仙筆

清原宣賢は、唐本をもとにし累代の家本を参考にして、書写加

点本十三卷を作った。それらはいずれも散逸し、現在本館に第

五卷一冊、京大図書館に第七・十卷の二冊を留めるのみ。該書

は原本散逸以前に、梅仙が書写本を作成して保存したもので、  
宣賢加点本の全容を知ることが出来る孤本。

一五五番

周易抄 上下経 六冊 宗二筆カ 片仮名交じり仮名抄

ソ式体 素表紙原裝 表紙副題梅仙筆と云う 二跋本

月令抄 二冊 近世初期写 片仮名交じり仮名抄 ナリ式

体 浅黄色表紙原裝

卷五首(一五八) (清原宣賢)  
享祿四年壬五月環翠軒宗尤抄之

春秋経左伝集解 三冊 宗二筆 漢文付訓 茶表紙原裝

春秋経伝集解(抄) 存卷三、六、十七、十九、三十 存三

冊 宗二筆 片仮名交じり仮名抄 ソ式体

識語

卷三首(一五四)  
天文九庚子七月一有八日環翠講南禅陽雲東長老聞書

同末(七年一五六)  
永祿甲子季朔書之 環翠講 南禅東長老聞書

卷三末(四年一五二三)  
永正癸酉九月二十七 宗一 六十七才

杜詩抄 二十卷 二五冊 宗二筆 片仮名交じり仮名抄

也式体 茶表紙原裝

識語

卷三末(一五七)

元龜二年辛未正月十五日抄之了以雪嶺和尚御聞書令清

書者也

卷三末  
以雪嶺多少聞書并統翠抄抄之畢 宗二

卷十一末(一五七)  
元龜三年壬申五月十七日抄之畢 宗一七十五才(花押)

卷十七末(一五八)

天正九年辛巳六月七日抄之了 宗一 八十四才

於一乘院門口孝經読申了

卷二十末(一五七)

天正七己卯十月四日已刻抄出了 宗二

杜詩統抄 存卷三、十一 存九冊 片仮名交じり仮名抄

ナリ式体 薄茶色表紙原裝

識語

卷四末(一五四)  
天文九庚子年正月廿五日至二月四日夜半第一卷ヨリ第

四卷至ヲ書了於泉南行田孫九郎宿焼場土藏内書之為

薪能見物南都上口筆了 (安盛カ)

一五六番

毛詩環翠口義 二十卷序一卷 十三冊 宗二筆 片仮名交

じり仮名抄 ナリ・ソ式混体 まま濁点あり

識語

卷十末(一五三)

天文八己亥書之了 閏口

卷十一末  
天文八年己閏六月四日於法隆寺脇坊抄之 (林宗二)

卷十三末  
天文八己閏六月廿二日於法隆寺太子伝講演次抄之 (安盛)

安盛

卷十四末 閏六 廿 卷十五首 六月九日 卷十八首(三)年一五三四 天文甲午卯月十四日

卷十八末 天文八年己九月廿五日一部功畢西大寺愛染万座執行

卷十九末 天文八己七月十一日於法隆寺抄之了今日太子伝結願了

卷二十末 天文八年亥七月七日於法隆寺脇坊抄之正義四十卷畢之 安盛

唐家詩法私抄 存地卷 一冊 室町末期写 片仮名交じり

仮名抄 ソ式体 茶表紙原裝

三体詩法抄 二冊 片仮名交じり仮名抄 也・ソ式混体

素表紙原裝

識語

(二五三七)

天文六酉正月廿一日 破関子

右抄者先年於南朝染筆至今天文十五曆巳□霜寓居相州 (一五四六)

金湯山早雲寺加朱点遂一校畢矣

(天文十五年) 丙午暮春中六 三関宗和誌之

古文孝経抄 一冊 近世初期写 片仮名交じり仮名抄 ナ

リ、ソ式混体 栗皮色表紙原裝

論語聴塵 十三卷 六冊 宗二筆 片仮名交じり仮名抄

茶表紙原裝 題簽「論抄冠冕」 類本は本館、蓬左文

庫、大阪府立図書館に架蔵

山谷抄 二十卷序一卷 六冊 宗二筆 片仮名交じり仮名

抄 ソ式体 まま濁点あり 茶表紙原裝

山谷詩私抄 二十卷序一卷 二二冊 宗二筆 片仮名交じ

り仮名抄 ソ式体 茶表紙原裝

識語

序末(一五六〇)(ママ)

永禄三年 酉霜月晦日抄之 宗一 六十四才

卷一末(一五六六)

永禄九年丙十月九日於一乘院殿長講堂抄之多門山与筒 (ママ)

井方毎日合戦 宗二 六十九才

卷五末(一五六七)

永禄十年卯二月五日抄之 宗二 七十才

此時多門城□之最中也 未知落居者乎

卷六末 永禄十年卯四月朔日抄之 宗二 七十才 卷七末 宗二秘之

卷七末 永禄九年丙二月五月初更記之畢 宗二 六十九才

卷十四末 永禄十年七月十六日於一乘院殿陣中抄之 宗二 七十才

卷十五末 永禄九年丙寅八月十四日抄之

卷十六末 永禄丙寅之八月十二日抄之 宗二 六十九才

此時於多門城依右衛門佐殿所望 六韜講之

卷十七末 永禄十年丁卯八月五日於一乘院殿抄之多門城郭未落居之

間也 宗二 七十才(花押)

卷十八末  
私抄 永祿十年丁卯八月廿五日乱中於一乘院殿抄之

宗一 七十才

卷十九末  
永祿九年丙寅七月十五日申刻抄之 宗二 六十九才

卷二十末  
永祿十年丁卯九月十日抄之畢於一乘院家訖劫乱中今夜私

宅可有放火之如何々々 宗二 満七十才 午刻

山谷詩抄 二十卷序一卷 二二冊 宗二筆 片仮名交じり

仮名抄 ソ式体 各冊表紙に「方／生」の朱文あり

柳文抄 四三卷序一卷 六冊 宗二筆 栗皮色表紙原裝

卷末識語

(五六五)  
永祿第八乙丑十月朔日書寫之了禪昌院繼□首座本借用

□ 宗一 六十八才 不□書之

江湖風月集抄 三冊 宗二筆 片仮名交じり仮名抄 也、

ソ式混体 茶表紙原裝

卷末識語

右此抄出者以 東海以天阿大和尚御聞書所令清書也先

是／三関居士於相州小田□<sup>(原)</sup>從始瑠璃灯棚碩聖籃裡魚碩

令抄出／坂洛之砌居士不日臥病不幾逝矣臨終之刻命予

曰令統抄／之任遺命從演史碩令清書之 二大老口義之

外不加愚意／之一言誠可謂至宝努之勿及外見矣今日相

当大祥忌備之□前／重拭淚痕而已

(五六六)  
永祿四年竜集辛酉首夏廿九 宗二(花押)(印)

## 現状と利用

兩足院は一寺院であるから、一般的な觀念で利用し、目的を果たそうとするといささか戸惑う。そこで、現状と利用を語るには、今回筆者はどのような手続きを経て拝覽の許諾を得たか、そしてその結果はどうであったかをしるすことが、より実情にそった報告をすることができると思うので、一つの参考として以下簡単に述べる。

当院は特に公開の形式をとってはいないので、利用の手続きなど皆目わからない。従つて、あらかじめ、所属、任務、要件(目的)、予定日時等をやや詳しく記し、それに、もし許可が得られれば公用として参りたい旨をも書き添え、私信で問い合わせた。その結果、折返し許諾の返書を頂戴したので、早速正式の依頼状が館から發送された、というのがその経緯である。

約束当日、来意を告げ、収蔵庫への立入を求めた。しかし、以前盜難事故に遇つてからは、何人をも入庫を許してない厳しさである。そこで「目録」を一覧の上、閲覽資料を提示するように促され、前掲の「抄物」を中心に選び、拝覽を許された次第である。

ここで「目録」について一言すると、何時頃作製されたものか詳らかではないが、薄葉の青野紙一四八枚を半折袋綴にし、毛筆で記されている。記載は箱号、書名、冊数が

主な事項であるが、例えば、五山版は「五山」、漢籍は「唐」と明示し、刊写別、筆者の明らかなものはその旨を揭示している（なお同目録は「昭和法宝総目録 第三卷」（大正新修大藏経別巻）中に収録されているが、現両足院架蔵目録とは、箱号等に異同があり一致しない。従って「法宝」目録では出納不能である。）。

右のような次第で入庫は許されなかったもので、保管の現状を知る機会がなかった。しかし、今回「抄物」関係のわずかの資料を披見して、著しく虫損が多いのには愕然とした。それは、ある程度予想していいことではなかった。無論一部を見て全体を論ずるのは軽率の誘いを免れないが、一例をあげれば、先に掲げた「江湖風月集抄」などは、三冊のうち第二冊は、恰も網の目のように虫に喰い荒されている状態で、貴重な資料の価値が失なわれていく姿を目の辺に見た思いである。その他の資料も、識語を解読している中で、文字の失われている個所に幾度か出会った。

こうした状態から推して、勿論すべての資料が同様であるとは断言できないが、保存状態は良好であるとはいいい切れないようである。

両足院は今財政的にどうなっているのか、知る由もない。見た限りでは、これらの資料は危機に直面している、といっても過言ではない。対応いただいた御住職にも、資料の将来を慮り苦衷の表情をかくし切れない様子であった。

こうした現状に鑑み、利用の際には飽くまでも慎重に、丁寧に取り扱う必要があるし、当然ながら、誰彼に無制限に閲覧させることは禁じているようである。加えて、当院では、任職御夫妻がすべてを預っている様であり、又寺としての種々の催しもあることなので人手も足らず、その方からの制約も必然である。

## むすび

両足院の現存資料は、両足院に襲蔵されてこそ意義がある。もし不幸にして散逸するような事態になれば、資料としての価値は半減するのではないか、というのが率直な感想である。寺の隆昌発展と、歴代学僧の勉学に勤しんだ事蹟とが、これらの資料を通じて読みとることができ、又戦国時代の激動期に身をおいてのその生き様を、如実に感得することもできる。

これら先達の残された足跡を可能な限り保存し、一そう有効に諸方面の研究に寄与されていくことが切望される。

しかし、それは又非常に困難な状況にあることも事実のようである。資料の補修一つを取上げてみても生易しい事柄ではない。今後どのようにこれらの資料を保存し、後世に継承していくか、その方策を探究し確立することが、両足院に課せられた緊急の課題のように思われる。



## 補記

当館発行の「貴重書解題 第七卷」五頁に、「周易抄

六卷 六冊」(足利学校旧蔵本)の書写年代を、室町時代末期から近世初期頃の写本として略述したが、その根拠は、卷末二跋の前にある該書の書写者と目される「滴翠亭

子」の墨記が、雅号その他から梅仙禅師(慶長十三年十月

廿七日寂<sup>享年</sup>)ではないかと推測したことにあつた。

梅仙は、名を東通、別号を滴翠又は南華と称し、林宗二の息男で、両足院の住持でもあつた。

現在両足院に架蔵されている「周易抄」(本稿二六頁)は、当館所蔵本と全くの同類本で、林宗二の自筆と目され、表紙に記す副題は、梅仙の筆といわれる。

こうした関係で或は梅仙の写しおいた一本かとも推測されたのであつたが、この度両足院に赴きそれ以外の梅仙の自筆本にふれ、筆跡を精査したが、右肩上りの、力強さを感じさせる特徴に、共通するところもみられるが、筆跡に疑問があり、当館本を梅仙の書写にかかるとは速断できないようである。従つて、書写年代も或は、近世初期を下るものかも知れない。

なお、伊藤師によると「滴翠」は、梅仙の雅号ではあるが、禅僧の場合に「滴翠子」とはいつても「滴翠亭子」とは用いないという御教示である。大方のご示教を乞う次第である。

## 追記

本稿を草するにあたり、両足院と林家との関係については、当院の現任職であられる伊藤東慎氏の著録にかかる「黄龍遺韻(両足院六百年史) 昭和三十二年刊」に詳述されているので、大方参考させていたゞいた。しかし、紙幅の都合で全くの粗略にすぎないことをお断りしておく。

今回の探訪に際して快よく御許可をいただき、又在院中繁忙にも拘らずいちいち御相手下さり、多くの御教示を賜った住職御夫妻に、心から御礼申上げる。

報告中に、両足院にとって礼を欠いた記事があるかとも思われるが、平常貴重書を扱っている者の一人として見て、資料の将来を憂慮し、よりよい保存を期待する一念から記したことで、全く他意はない。御海容を乞う。

(いがらし・きんぎぶろう 人文課主査)